

令和5年3月

シニアの文集  
《あゆみ6号》



江汐公園バラ園 (2022.5.26)



月下美人 (2022.10.30 午後 9.00 撮影)



初日の出 (2023.1.1)



第4回グランドゴルフ大会 (2022.10.20)

AYSA 西部部会

## 目 次

1. ラーゲリより愛を込めて・・・浅田 宏之 P.3～10
2. 私の競馬の楽しみ方・・・安宅喜久雄 P.11～13
3. 登校拒否・引きこもり問題の対策をどうするか  
・・・薄井洋基 P. 14～16
4. 湯水のごとく・・・江本 明夫 P.17
5. 英語多読 2か月・・・金子 弦 P.18～19
6. 地政学視点から見た世界の動きに関する雑感  
・・・北見 幹治 P.20～22
7. 山口県の自然災害伝承碑探訪・・・住居 孝紀 P.23～25
8. 電子書籍小説 碧き海舞台 まえがき  
・・・高津 清流 P.26～27
9. 2040年の日本（野口悠紀雄著）を読んで気付くこと  
・・・宮崎 修五 P.26～27
10. ラジオ体操と乾電池・・・宮本 政英 P.30～32
11. 山田洋次とちくわとうべと・・・村野 司郎 P.33～35

令和5年3月9日

## 「ラーゲリより愛を込めて」

AYSA 西部部会会員 浅田 宏之

映画館で映画を観るのは何年振りだろうか？最後に行ったのは、恐らく十年以上も前のことかもしれない。とは言っても、映画が嫌いな訳ではなく、専ら昼食後にBSシネマをソファーに寝そべて観るのが平日の日課になっているし、娘がプレゼントしてくれたAmazon Prime Videoを時々楽しんでいる。でも、今回は少し違った経緯で映画館に出掛けることになった。そのキッカケとなったのは、母校松江北高校の同級生のI君の私的な同窓会通信「Sサロン」であった。

(以下文章中敬称略)

「ラーゲリより愛を込めて」は、作家辺見じゅん(角川書店の創業者角川源蔵の長女)のノンフィクション「収容所から来た遺書」を映画化したものである。作品のあらすじは後述するとして、主人公である「山本幡男」とI君の関係を少し記しておく。山本は、島根県隠岐島生まれで、旧制松江中学(松江北校の前身)を卒業し、満州に渡って満鉄に勤務中ソ連が参戦、終戦後はシベリアの収容所に抑留された。過酷な労働と抑圧の中で帰国に希望しながら生きてきたが叶わず、1954年8月25日に45歳で病没した。山本は、亡くなる直前に病床で記した母、妻および4人の子供宛の遺書を書いたが、それを捕虜仲間が手分けして暗記し、帰還後に家族に伝えるというのが映画のメインストーリーであった。Sサロンには次の事柄が記載されていた。山本の次男厚生は東京芸大卒の建築家で、I君の知人。最近丹沢にある厚生の自宅を訪問したこと。映画は12月9日から公開されたが、早速鑑賞したこと。さらに、辺見が約30年前東京松江会の総会で、この作品を書き上げた時のエピソードなどについて講演したことなど……。そんな訳で、この映画を観ない訳にはいかないと思立った。

映画は、ハルピンでの山本(二宮和也)の妹の結婚式の披露宴で、山本が妻モジミ(北川景子)と4人の子供達とが楽しく会話しながら食事をしているシーンから始まった。突然、その画面はソ連軍の侵攻により砲弾の嵐に中を逃げ惑う家族の姿に切り変わる。着弾して破裂する爆音が大音響の迫力で映画館に響き渡る、悲劇の始まりを象徴する様に……。宇部シネマスクエア7には3人だけの観客。私は、100席足らずの中央の座席に座って、ほぼ独り占めの映画鑑賞。自宅の映画では味わえない迫力で……。

やがて、山本は捕虜となって、シベリアの強制収容所に送られた。カメラは、極寒の中での過酷な労働、劣悪な食事と住環境、ソ連兵の理不尽な暴行など、次々と捕虜たちに襲い掛かる苦難の連続を追っていく。山本は、ロシア語の能力を買われて通訳となり、帰国(ダモイ)した際にすぐに順応するために勉強会や俳句会を主宰し、仲間からは慕われる存在となっていった。荒んだ収容所

の生活の中で、迷い込んだ黒い犬「クロ」との触れ合いは、ホッとする一幕でもあった。また、糸と綿で作ったボールやバット、ミットを作った山本たちは野球に興じていたが、ソ連の将校が来て解散させられそうになった。山本は続けられるように懇願したが聞き入れられず、逆に一ヶ月営倉に入れられる始末。そうした過酷な収容所の生活の中で、病に冒されて次第に衰弱していったが、残した家族に会える望みを心の支えとして懸命に生きようとした。折しも、ソ連の捕虜に対する待遇は、スターリンの死去によって多少軟化したが、その表れの1つが日本の家族への通信が始まったことだ。山本は、ソ連が用意した葉書に妻宛ての近況を書いた(病気のことは知らせなかった)。仲間には返事が届くが、山本には一向に届かない。妻からの返事を待つ悲壮感こもった姿と無事の知らせを受けた時の山本の嬉しさの対比の映像。さらに、病に冒されて次第に弱っていく中で、なおも気力を振り絞って生きようとする姿を主演の二宮和也は最高に演じていた。

昭和29年、九年間の収容所の生活は、山本の生命を蝕みベッドに横たわる日々が続いた。7月に入ってもはや再起は難しいと判断した仲間は、山本に遺書を書くように勧めた。山本は一瞬ためらったが、その夜母、妻、子ども達への4通の遺書を一気にノートに書いた。そして、遺書を確実に家族に届けてもらいたいと仲間に依頼した。収容所ではそうした書類を所有するのは禁止されているので、見つかったら廃棄されてしまう。そこで、仲間は手分けして暗記して、帰国後家族に届けることを思いつく。そして、8月25日、山本は誰にも看取られずに息絶えた。

時は過ぎて昭和31年暮も迫った12月24日、鳩山内閣により日ソ平和条約が締結された結果を受けて、残されていた捕虜たちは最後の帰還船興安丸でナホトカを出港し、舞鶴に向かった。その時、一匹の黒犬が船を追って流氷の上を走ってくる。収容所で飼われていたクロである。一瞬目を疑い、映画を盛り上げるためのフィクションかと思いきや?後日、資料を調べたら、クロは仲間と一緒に日本の地を踏み、舞鶴市役所の職員に引き取られて、数年後死んだとの記録が残っていた。クライマックスは、帰国した仲間の4人が未亡人宅を訪ねて遺書を報告するシーンであった。

いよいよ最後のシーンは?ガラッと変わって2022年。長男顕一の孫娘の結婚式でのスピーチで「今日という日を覚えておくのだよ」と声をかけるシーン。顕一は、ハルピンでの妹の結婚式で、父幡男が顕一に言った言葉を思い出し、孫娘に伝えたかったのだ。これは、辺見の原作にはなかったが、瀬々敬久監督が敢えてそうしたシーンを挿入することで、悲惨な戦争によって犠牲となった山本の死と対比させて「親から子へ、子から孫へと続く家族のあり方、命の大切さ」をメッセージとして最も訴えたかったことではないだろうか?

映画を観終わって、山本のことをさらに詳しく知りたいと原作の「収容所から来た遺言」と同著者の「戦場から届いた遺言」の2冊を図書館から借りてきた。辺見は、昭和も終わりに近づいた80年代に太平洋戦争に関わる遺書、手紙、日記など編纂に携わり、遺族から寄せられた2千以上の遺書に触れることができ、その中から数冊のノンフィクション作品を執筆している。その内容は、丹念な聞き取りを元に構成されているとして評価が高い。

辺見が、山本の遺書に出会ったのは、昭和61年の夏であった。読売新聞社と角川書店が主催した「昭和の遺書」の募集に応じて全国から寄せられた多数の遺書の中の一通に山本の妻モジミの手紙があった。この募集の条件には未発表に限るとあったため、この遺書は選外として弾かれたものだった。しかし、辺見は編者として目を通した時の感動が忘れられず、後年「収容所・・・」を執筆することになったと語っている。本書を書き上げるため、モジミをはじめ4人の子供はもちろん捕虜仲間など実に40数名の方々取材し、事実にも忠実に再現することを試みた。そうして集めた資料は、作品の何十倍を超える量となったとも言っている。そうした功績が認められ、この作品で89年に講談社ノンフィクション賞を、90年には大宅壮一ノンフィクション賞を受賞している。

前述したように、山本は、明治41年(1908) 隠岐郡西ノ島町で、(隠岐諸島は、島前、島後の二つの島で構成されており、西ノ島町は西側の島前島) 6人兄妹の長男として生まれた。父親は島の小学校の校長をしており、教育熱心であった。当時隠岐には中学がなく、県下一の難関の旧制松江中学に進学するしかなかった。後年、級友の田平式(松中46期)は、同窓会誌に寄稿し、山本との親交や生き様について書き残している。山本は成績優秀で、副級長をしていた。また、中学時代から文才に長けていて、当時の教師の特徴をとらえた数え歌を作って発表したエピソードを語っている。

(注1、後述)

山本は、卒業後三高→京都大に進みたいと願っていたが、弟妹がいるため父親から実業学校への進学を懇願された。大正15年東京外国語学校(現東京外大)露西亜語科に入学した。露西亜語科を選んだのは、中学時代からロシア文学に傾倒していたからである。やがて、昭和になり高等教育課程に在籍している学生は、大なり小なりマルキシズムの影響を受けていたが、山本もそのひとりであった。卒業を前に三・一五事件が起き、共産党員とそのシンパ1500人以上が検挙された。山本も街頭連絡の途上で逮捕され、退学処分となった。父親は既に校長を退職し、実弟が営む石炭商を手伝うため戸畑に移っていたが、息子の退学処分にショックを受け、心労が重なり急死した。仲間は復学を勧めたが、山本はそれを蹴って学校を退学して、母と妹たちの面倒を見るために叔父の店の手伝うことで戸畑に移った。そして、昭和8年(1933)、隠岐で小学校教師をしていた是津モジミ(ぜつつ、モジミは珍しい名だ?)と結婚した。ここで、辺見の著書やその他の資料から家族のことについてもう少し触れて

おきたい。昭和 10 年には長男顕一が誕生しているが、昭和 11 年には家族を残し満州に渡り、満鉄に入社して北方調査部に配属された。ようやく生計の目途が立ったので、妻子はもとより母、妹 3 人を呼び寄せ、平穏な生活を送れるようになり、次男厚生、三男誠之、長女はるかの子供にも恵まれた。しかし、太平洋戦争が激化し、昭和 19 年には召集令状により二等兵として入営した。昭和 20 年 8 月、ソ連の参戦と終戦の混乱の中で、山本はソ連に連行された。妻モジミは、姑と 4 人の幼い子等を連れ、昭和 21 年 9 月に葫蘆島から元軍艦の輸送船で博多港に引き上げてくることができた。戸畑の義弟のもとに姑を預け、隠岐の実家がある五箇村に身を寄せることにした。実家の是津家は、村では有数の資産家であったが、農地解放の結果により戦前の旧家では通らなくなっていた。生活していくために、モジミは魚の行商を始めた。五箇は魚市場がないので、20 キロ離れた西郷港まで行って仕入れて売りさばく。毎朝 2 時には家を出て暗い道を通ったという。この苦労も半年ほどで終りをつげたのは、地元の小学校での教師の職を得たことによる。やがて昭和 26 年長男顕一が松江高校（前身は父が卒業した松江中学）に入学したのを機に、松江の小学校への転勤が希望し、松江市西茶町に移り住むことになった。顕一は、松江高校でトップの成績であったそうで、東大の受験を目指していた。母は子どもの将来の教育のため、上京を決意し、知人のツテで埼玉県大宮の聾学校に転勤することができ、一足先に転居した。昭和 29 年に顕一が無事東大に合格する。正に、「孟母三遷」を地で行ったモジミの行動は、山本は、子供達の教育に対する思いを何度となく手紙でモジミに伝えていたが、それを忠実に守った結果であった。因みに、顕一は東大の仏文を出て仏文学者として立教大学で教鞭をとり、退職後父幡男についての著書も出版している。次男の厚生は前述したように、東京芸大建築科を出て家屋設計家となり、三男誠之は東大、長女はるかは東京外大を出て、それぞれの分野で活躍している。

山本を語るにおいて、一夜にして書いた遺書を仲間が暗記して持ち帰り、帰国後家族に伝えたという実話を避けて通る訳にはいかない。次に、それについて記述することにする。

山本は、ウラル山脈の東麓の石炭で栄えたスベルドオロフクでの 2 年半の収容所を終え、捕虜仲間と一緒に列車で帰国に向けての移送途中、ハバロフスクで突然下車させられ、元上司の密告によりスパイ容疑をかけられ、謂れのない罪で 25 年の刑を受けた。同時期にソ連各地の収容所からハバロフスクの矯正労働収容所に集められた捕虜は 2,000 人以上に膨れ上がっていた。

長い抑留生活の中で山本の病状は、日に日に悪化していった。仲間は、心配してソ連当局に中央病院で治療してくれるよう請願書を出し、ハンガーストライキまで企てたが、なかなか実現しない。昭和 29 年（1954）2 月にやっと入院出来たが、翌日には収容所に戻された。もう手の付けられない状態であった。病名は、「咽頭癌性肉腫」。次第に衰弱していく山本は、誰の眼にも再起は絶望的なのが明らかになっていた。そこで、団本部の初代団長の瀬島龍三（注 2、後述）は、山本と親しい佐藤に「遺書を書かせたらどうか？」と提案した。佐藤は、昭和 29 年 7 月 1 日、意を決し「遺書を書くように」とノート

に書いて渡した。山本は軽く頷き眼を閉じた。その夜、ベッドに横たわりながら、一気にノート 15 ページにわたる遺書を書いた。

遺書は全部で 4 通。一通は「本文」、他の 3 通は、「お母さま」「妻よ」「子ども等へ」であった。ここからがアンビリーバブルストーリー（後年、TV 番組でも取り上げられた）。収容所内ではメモなどは一切許されず、ソ連側に見つかったら取り上げられるどころか独房行きとなる。そこで、山本は仲間に手分けして暗記してもらい、帰国した暁に家族に届けてもらいたいと依頼する。

仲間が遺書を家族に伝えるところで、映画は事実とは少し違ったストーリーとなっていた。映画では 4 人全員が暗記して記憶を辿りながら伝えたが、実際は 6 通が訪問あるいは手紙で届けられている。このエピソードには後日談があり、最後に届けた 6 通目は、山本と同郷（島根県東出雲町、現松江市）在住の新見が小包と共に手紙を送ったものだった。山本が亡くなって実に 33 年経った年（昭和 62 年）で、遺書は糸巻に包んでカムフラージュして持ち帰ったものであった。新見は、昭和 32 年に仲間 3 人と共にモジミを訪問した際手渡すつもりでいたが、既にすべて届けられていることを知って手渡すのを躊躇した。しかし、山本との約束を果たさずしてあの世で山本に顔向けできないと思い、ついに 33 回忌の年に送って来たのだという。

こうして、山本の遺書は、残された家族に届けられた。妻モジミ宛のものは、帰国して妻に会う強い希望、それが実現できない無念さ、そして何よりも感謝の気持ちで満ち溢れている（以下抜粋転写）。

「妻よ！よくやった。実によくやった。（中略）君を幸福にしてやるために生まれ代わったような立派な夫になるために、帰国の日を私は待ち焦がれてきたことか！一目でいい、君に会って胸いっぱい感謝の言葉をかけたかった！万葉の烈女にもまさる君の奮闘を讃へたかった！ああ、しかし到頭君と死に別れてゆくべき日が来た。（中略）二十二年間の結婚生活ではあったが、私は君の愛情と刻苦奮闘と意思のたくましさ、旺盛なる生活力に感激し、感謝し、信頼し、実によき妻を持ったという喜びに溢れている。さようなら」

さらに、胸を打つ遺言は、子供たちへ注がれた愛情に満ちた人生の指針を伝えるものであった。

〔子供等へ。山本顕一 厚生 誠之 はるか 君たちに会えずして死ぬことが一番悲しい。（中略）また君たちはどんなに辛い日があらうとも、人類の文化創造に参加し、人類の幸福を増進するといふ進歩的な理想を忘れてはならぬ。偏頗で驕傲な思想に迷ってはならぬ。どこまでも真面目な、人道に基づく自由、博愛、幸福、正義の道を進んで呉れ。〕

最後に勝つものは道義であり、誠であり、まごころである。友だちと交際する場合にも、社会的に活動する場合にも、生活のあらゆる部面において、この言葉を片時も忘れてはならぬぞ。（中略）君等が立派に成長してゆくであろうことを思ひつつ、私は満足して死んでゆく。どうか健康に幸福に生きて

くれ。長生きしておくれ。

最後に自作の戒名 久遠院法光日眼信士（この戒名は、最初の原文とは違い、翌三日に久遠院智光日慈信士から改めたもの）

山本幡男

一九五四年七月二日

最後にシベリア抑留中に起った「民主運動」についても触れておかねばならない。このことについては映画ではほとんど触れていないが、日本軍人や民間人によって起きた一連の思想運動であった。収容所では、元々共産主義者だった捕虜が、指導者となって革命や階級闘争の思想を育てるため、共産主義教育が定期的に行われた。革命思想を持たない捕虜を「反動」「前職者」と呼び、執拗なつるし上げや露骨な暴行が起こった。兵卒や下士官に元上官を殴らせるリンチがしばしば起った。この運動のリーダーの中には、浅原正基や袴田陸奥男などがおり、捕虜仲間から「シベリア天皇」と呼ばれ、恐れられていた。また、民主運動では、「日本新聞」が重要な役割を果たした。山本たちの収容所でも同志会という集会では、日本新聞の輪読会を行った。紙面にはソ連の新5か年計画の解説や「民主運動」の実践状況などが取り上げられていた。こうしたシベリア民主主義運動は、不幸な経緯を辿ることになった。捕虜たちは帰国を最大の願いとして苦しい生活を耐え抜いてきたが、ソ連当局や日本人アクティブたちは、それを餌にしたからだ。日本人同士の吊し上げや密告、「反動は使い殺せ」といった過重労働を強制させるような悲劇を増加させることになった。

シベリア民主運動での犠牲者で記憶から離れない人がいる。私の郷里から出征してシベリア抑留を体験した二人の帰還兵である。実家の隣のMと村はずれのKの二人である。生まれ育った所は、松江の中心地から4kmほど離れた郊外の田舎の小さな集落である。当時は松江駅までバスは通っていたが、農家の人々の街までの交通手段は、大橋川、中川、朝酌川と辿る専ら手漕ぎ舟に頼っていた。シベリアから兵隊さんが復員して来るといので、集落の住民は総出で船着き場に集まり出迎えた。小学生だった私も大人に混じっていたが、Mの時は恐らく昭和24、5年頃で、幼かった性が船から降り立った際、万歳をしたことはだけは覚えている。その後、Mは農家の長男として嫁をもらい、社会的にも家庭的にも幸せな人生を送られたが、家族のだれ一人にもシベリアでの生活については一切話さなかったと聞いている。余程つらい体験をされたのではと推察する。一方、Kは30年頃に帰国したと記憶しているが、船着き場での歓迎式において、「私は日本共産党に一生を捧げます」と高らかに宣言した光景を今でも鮮明に覚えている。地元の人から聞いたところによれば、出征前は裕福な地主の次男であったが、この挨拶は民主運動により転向した証であった。本人にしてみれば「故郷に錦を飾る」との決意の表れであったろうが、戦後数年が経って日本共産党は「六全協」で武力革命を放棄する方針転換を行ったこともあり、にわか革命家への世間の風当たりは強く、周囲からは受け入れられず、結婚もせずに孤独な人生を送ることになってしまった。正に典型的な犠牲者のひとりである。



シベリア抑留については、戦後数多くの書籍や映像などによってその実態が明らかになりつつある。抑留された日本人の数は、軍人・民間人合わせて57万人（厚生省調べ）、ソ連側の記録では約61万人といわれており、正確な数字は把握されていない。捕虜収容所は旧ソ連各地に1200カ所以上点在し、極寒の地で飢えと重労働の日々で、約一割を超える7万人以上が死亡したと伝えられている。（敗戦国ドイツの場合は、もっと悲惨で捕虜や死者の数は一桁以上高かったことはあまり知られていない）ソ連の行為は武装解除した日本兵の課程への復帰を保障したポツダム宣言に反するものであったが、ソ連側は戦闘中に合法的に拘束した「捕虜」であり、「抑留者」に当たらないので違反はないとした。

日本人がシベリア抑留の悲劇には、政治的、思想的背景が影響したとも言われている。スターリンは8月16日には日本人は捕虜として用いないとの方針を打ち出していたが、8月23日にこれを翻し、強制収容所に移送し、強制労働を行わせる命令を下した。これには関東軍総司令部の「労働力提供を容認する」との密約文書をソ連側に送ったという説がある。また後述する瀬島龍三の密約。さらに、北北海道分割統治をスターリンが主張したが、米国トルーマンはこれを拒否し、北海道の代償として捕虜のシベリア移送を容認した等の説が存在するが、真偽は明らかではない。いずれにしても、スターリン独裁下においては、国家建設のための労働力は不足していたので、捕虜を労働力として確保することは共産主義体制強化のためには必要不可欠だった。

シベリア抑留に関連した日本共産党や日本社会党が犯した過ちについても特筆しておくべきだろう。最も有名な出来事は、「徳田要請問題」であった。この事件は、1950年2月にソ連のシベリア抑留から帰還した引揚者の一部が、自分たちの帰国が遅れたのは日本共産党書記長であった徳田球一の要請「日本人にして赤化思想を持たぬ者は絶対に日本に帰してくれるな」に、よるものだと主張した事件。3月から4月にかけて衆議院と参議院の各委員会で当事者として証人喚問された菅季治が遺書を残して自殺したことで話題となった。

さらに、1955年社会党左派の訪ソ議員団（団長：野溝勝がハバロフスク収容所を訪問した際、収容者の一部が決死の思いで窮状を訴えたにもかかわらず、握り潰し、記者会見で「戦犯たちの待遇は決して悪くはないという印象を受けた。」と虚偽の報告を行った事件。ソ連当局は、こうした機会を共産主義社会の美化、宣伝に利用してきた。親ソ国会議員たちは、当局の肩車に載せられて却って問題解決を遅らせたと言われている。

映画「ラーゲリより愛を込めて」から、シベリア抑留の実態を調べていくと、山本が遺書の中で子ども達に伝えたかった「最後に勝つものは道義であり、誠であり、まごころである。」言葉が、いかにも虚しい響きに聞こえてくる。共産主義体制のスターリンの悪政、ロシアのプーチンのウクライナ侵攻、北朝鮮の核開発等々キリがない。それでも我々はこの言葉をも一度心に刻むことが必要ではないか……？

## <おわりに>

この文章の最終稿を読み返していた3月7日4時過ぎに妻慶子が急死した。4日前から体調を崩し、かかりつけ医に診てもらっていたが、胃腸炎との診断。しかし、当日午前中に診察後自宅で急変し、入院のための紹介状を依頼し、それを受け取りに行った約20分の空白時間。帰宅してベッドのわきに倒れている妻を発見。心肺停止。救急車を手配し、山大の救急に移送したが手遅れ。嗚呼、運命のいたずら！！

最後に、山本の妻宛て遺言にならって、妻に次のことばを送ることお許し願いたい。

「五十二年間の結婚生活ではあったが、私は君の愛情と刻苦奮闘と意思のたくましさ、旺盛なる生活力に感激し、感謝し、信頼し、実によき妻を持ったという喜びに溢れている。さようなら」

### (注1)

松江中学は、明治9年(1876年)創立の旧制中学校。戦後県立松江高校、昭和36年北南の2校に分裂。北高が松江中の流れを継承。中学校の敷地には双幹の赤松がシンボリとしてあり、これに因んで同窓会は「双松会」と称す。ホームページは、[双松会 \(soshokai.com\)](http://soshokai.com)。ここに、昭和44年以降の同窓会誌「双松会会報」がアーカイブで掲載されている。その第5号(昭和59年発行)から6回シリーズで、山本と4年間寄宿舎で生活を共にした田平武氏が「ああ！山本幡男君」と題する寄稿文を寄せている。(最終稿の6回は平成に元号が変わった年で欠版となっている)余談だが、このアーカイブを開いてみて、面白い発見をした。作家太宰治の正妻である美知子の父親石原初太郎は、地質学者であったが、松江中学の校長を務めていたことが記載されていた。(知らなかった・・・)松江中学に移る前は豊浦中の校長をしていたこともある。

### (注2)

瀬島は、知る人ぞ知るあの瀬島である。陸大首席卒。収容所では団長を務め、ソ連との交渉窓口として重要な役割を果たした。また、復員して伊藤忠に入り会長まで務めた。田中角栄や中曽根康弘など大物政治家との親交により日本の政治・経済界に影響力を及ぼしたのは記憶に新しい。また、「日本軍人の労働力提供の密約」疑惑の当事者だったとの説もある。真偽のほどは不明であるが、ソ連側が捕虜の強制労働や民主運動などの決定に一部の日本人が関与したことは疑う余地はない。

(完)

令和5年2月28日

## 「私の競馬の楽しみ方」

AYSA 西部部会会員 安宅喜久雄

私の趣味は園芸と競馬である。園芸の話は別稿に譲るとして、今回は競馬について私流の楽しみ方を述べてみたい。但し、これは楽しみ方であって的中法ではないので、念のため。

学生の時から何十年も化学実験を行ってきた。自然科学である化学実験では結果を解析して次の実験を立案する。但しその基礎的な考え方は量子力学を根本に過去の反応例を参照して仮説を立てていくものである。Yes or No の仮説もあれば、仮説の検証をする実験もある、仮説設定に重要なのが先入観を持たないデータ解析が重要である。こうなればと思っていることと違うことが、新しい発見に繋がるのだが、それには多くのデータを解析し、時にはそれらを止揚的に理解できる柔軟な考えが発見に繋がる。立場的、体力的に実験ができなくなってからは共同研究者の実験データを解析し、次に打つ手段を考える仕事をしてきたので、データを読み解く能力は他の人よりは持っているつもりである。

競馬予想も各馬の過去の成績を分析し、この競争で上位の成績を残せそうな馬を選択することと実験データの解析は同じと考えて、データから予想してみることに魅力を感じ、もう数十年も競馬予想を楽しんでいる。従ってデータがない全馬初出走の新馬戦の予想はしない。前の馬が飛び損ねたときに大きな不利を受けることがある障害レースの馬券も購入しない。馬の能力差が歴然としている地方競馬もしない、面白くない地方競馬は廃れていっている（南関東の4場以外は青色吐息で、かろうじてネット投票で持ちこたえている）競馬は最も経費が掛かる公営競技で赤字続きの地方競馬場も多い。

データ解析には時間がかかるので大きなレースの他はあまり購入しないので出費はさほど大きくなく、全的中しなくても趣味の範囲の出費で済む。園芸の出費の方が多いくらいである。ただ、この心境に到達するまでには紆余曲折があった。

会社を退職してから、まず行ったことは、我流の解析で予想が的中するかの検証である。世の中には予想ソフトが多々あるが、高価で到底当たるとは思えないし、そんなものがあれば競馬は成り立たない。インターネットの予想サイトが一番怪しい。儲かる方法を他人には教えないと思うのだが。

最近は全てのデータはインターネットで画像を含めて無料で閲覧できる。しかし、個々の馬の最近、直前の調子は調教動画を見ても余りわからない。まし

てパドクを見ただけでは全くわからない。直前の馬の調子や調教師等の厩舎関係者の感想を含めて、総合的に評価、論評して予想を下す専門家をトラックマンという。言い換えればトラックマンの良し悪しで的中率が変わる。

こうして約半年、これに決めたという予想紙（専門紙）を買い馬券は買わずに予想をしてみた。回収率は70%程度であった。これなら何とか儲けることはできなくても、楽しみとしてはできるのではないかと考え、実際に馬券を買ってみるとこれが全く当たらない。

因みに専門紙を読むのは、かなりの経験が必要である。専門紙には多くの専門用語（テクニカルタームや経験則に基づく諺）を含む文言等初心者には解らないことが多い。競馬用語はJRAのHPを参照ください。◎○▲△×★などの記号も期待度が◎○以外の期待度の順序は新聞各社でばらばらである。専門紙には難読漢字も結構多く文語調の時もあり、読み込むにはかなりの知識に加えて語彙力が必要で、スポーツ紙で予想する人が多いのはその価格（¥500）以外に、難解さにあると思われる。

実際に馬券を購入する時と買わない時の的中率の差は、欲が予想を狂わせていたとも考えたが、そうでは無かった。振り返れば、当たらない⇒予想のスタイルを変える⇒当たらない⇒またスタイルを変える の繰り返しであることに気づくのに半年以上かかった。馬券の返金率は70%~75%である。的中率70%は普通で、30%の時もあれば100%超の時もある。同じ買い方であれば正規分布から回収70%を中心に標準偏差 $\pm\sigma$ に収まる確率は85%だが70%+ $\sigma$ の確率は7.5%しかないと肝に銘じること。

サラブレッドは年間7000頭以上生産されている。中央競馬に出走できるのは65%、1勝できるのは35%。4歳までに一度も勝たなければ中央競馬での馬生は終わる。オープン馬と言われる一流馬になるのは3%程度。一番グレードの高いG1に勝てる馬は1%未満という厳しい競争社会である。中央で勝てない馬は地方に行って競馬を続けるか、乗馬用になるか、馬肉にされるかである。数は少ないが馬の養老施設もある。牝馬の多くは繁殖馬として子供を産むために使用される。中央競馬の馬房に在籍できる馬の数は約3900頭（全調教師が持てる馬房の数）なので、勝てる見込みのない馬の居場所はない。競馬は勝つことに意味があり、鼻差でも2位はダメな世界である。

競馬界は調教師という絶対権力者を頂点とする中小企業体の集合である。調教師が馬の入厩から調教予定、出走レースを決定する。無論馬主の意向も考慮されるが、調教師の意向が絶対的である。登録馬は20000頭以上いるので馬房に入れられない馬は成長とリフレッシュを兼ねた放牧に出される。のんびり草を食べているわけではなく過酷な調教も行われる。放牧から帰っても10日以上経過しないとレースに出られない。このローテーションが最も大事な馬の管理で調

## 教師の手腕が問われる

馬にも右利き、左利きがあり、右左どちらの廻りの成績が良かったかを私が重視するファクターの一つである。競馬は唯一右周りでも行われる競技である（日本では東京、新潟、中京が左回り、その他7場は右回り、海外でも同じく両方ある。他のスポーツは全て左回り）。

騎手も一つの大きな要素である。多くの調教師に属さないフリー騎手が騎乗する馬の選択は代理人が行う。代理人はチームを作り、勝てる可能性の高い馬を選ぶ。このチームメンバーの多くが元トラックマンであることは、馬の選別が難しいことの証である。

従って馬券戦略はこれら全ての要素を組み入れた、いわば馬の能力以外に人間の意志が働く部分もあって、予想を困難にしている。そこにはホースマンのロマンという部分もあるので、それを無視して馬券はとれない。これらの要素も頭に入れてデータ解析をするので、ファクターが非常に多く、予想は疲れる作業である。的中したときは疲れも吹き飛ばすが、注目した穴馬が惜しくも着外（馬券外4、5着）になっても楽しみがある。

馬券には単勝、複勝、枠連、馬連、馬単、三連複、3連単、ワイド、WIN5（指定5レースの全ての1着馬を当てる。最高賞金6億円）があり。買い方にも、一頭軸、二頭軸、流し、マルチはてはフォーメーションという買い方もあり、理解には高校数学の順列組み合わせと確率の再履修が必須である。儲けるのではなく楽しむことが大前提の私の競馬に関する教訓は以下である。

- 1 一日に買う馬券の上限額は絶対に守る。
- 2 「競馬に絶対はない」の格言通り、断然の人気馬でも大金を投入しない。
- 3 教訓・諺の類は心の片隅に入れておき、ホースマンのロマンに逆らわない。
- 5 予想スタイルを途中で変えない（スランプでも初心=自分の考えを貫く）
- 6 TVの解説者が恐れる「ガミる」ことを、まったく気にしない。「ガミる」とは購入馬券額より配当金が少ないことを「粋が身を食う」から「ガミる」「トリガミ」という。
- 7 WIN5は買わない。高額の中はほぼ不可能だし、何百通りも買うことになる。1000万円以上の配当があるとJRAから国税庁に通知され一時所得とみなされ、多額の税金がとられる。

令和5年2月3日

## 「登校拒否・引きこもり問題の対策をどうするのか？」

AYSA 西部部会会員 薄井洋基

大学における教育研究およびマネジメントの仕事を終えた後、第2の人生において、若い人達あるいは子ども達の教育支援を心がける毎日です。本稿では、登校拒否・引きこもりについて私の経験をお話しして、問題解決の足掛かりになればと考えています。

話は20年ちょっと前に遡りますが、2000年頃に文部科学省が進める大学統合の流れに沿って、神戸商船大学と神戸大学との統合が現実のこととして検討され始めました。当時、船員養成の高等教育機関として日本には東京商船大学と神戸商船大学がありました。私は当時神戸大学評議員でしたが、神戸商船大学との統合検討委員会の一員として、商船大学側との交渉にあたっていました。結局2003年10月に神戸商船大学は神戸大学の1学部（海事科学部(Faculty of Maritime)）として統合され、同じ時期に東京商船大学は東京水産大学と統合して東京海洋大学(Tokyo University of Marine Science and Technology)になりました。私は当時も個人的には「海洋科学部」が良いのではないかと考えていましたが、商船大学側の船員養成に対する思いが強く、神戸大学側が譲歩して「海事科学部」になった経緯があります。

さて、組織が統合されると色々なところで思わぬ齟齬が生じることが多々あります。海事科学部には「白鷗寮」と言う比較的新しい寮があり、他学部の学生も希望すれば入寮できるようになりました。寮は学生たちの自治が認められており、商船大学の時からの伝統で色々な行事が続けられていました。その一つに、毎日ではありませんが、寮生は早朝起床後に係留されているカッターに分乗して漕艇訓練をしていました。統合から数年経って文系学部に入學した女子学生が新しい白鷗寮の環境に魅力を感じて入寮してきたのですが、体力に自信のない彼女は漕艇訓練にショックを受けました。また商船大学の伝統を受け継ぐ寮の自治活動にもなじみませんでした。数か月が経過したところで彼女は登校拒否になり、とうとう休学して自宅に帰ってしまいました。ご両親は理不尽な寮の行事に立腹して、大学に訴訟を起こす意向を示しました。対応窓口が学務部の学生掛でしたが、大学本部と相談の上白鷗寮の運営について改革案をまとめ寮生たちを指導すると共に、自宅に帰ってしまった女子学生と家族に謝罪すると共に、彼女の復学を促しました。しかしながら、本人の鬱状態は改善せず自宅での引きこもりが続きました。

2007年2月に私は神戸大学理事副学長に就任しました。当時は国立大学法人化後の実績の評価への対応が大変で、私は学生・教育担当に加えて神戸市ポートアイランドに設置が決まったばかりの次世代スーパーコンピュータ（後にスパコン京と命名、現在のスパコン富岳の前進）の担当となりました。就任早々学務部長から上記の海事科学部白鷗寮の問題の説明があり、問題解決には大学側の謝罪が必要で、私に謝罪に行って欲しい旨の要請がありました。学長を行かせるわけにはいきませんので、私が行くこととしました。当日は、ご両親、本人に加えて親戚の方が同席しており、親戚の方からはかなり強い調子で大学を非難されました。私は大学としての謝罪を述べると共に、不条理と思われる外からの力によってストレスがかかり、私自身も過去に心理的な苦しい状況が続いたこと、それを克服するのは本人の自己治癒力であることをお話しして、休学中の本人を力づけると共に、新しい方向性を見つけて欲しいと述べました。その後、本人は退学届けを出した後、別の大学に入学して新しく学生生活を始めることとなり、大学への訴訟問題は取り下げることとなったと連絡がありました。

不登校と引きこもりの最近のデータは以下のようになっています。

「2018年のデータでは小学校の不登校児童は全国で4万5千人（0.7%）、中学校では11万9千人（3.6%）、高校生でも5万3千人（1.6%）だそうです。また、①1週間以上休んだことがある（6万人）とか、②登校するけれども教室に行かない、授業への参加時間が少ない（13万人）、③教室で過ごすのが学校がつらい（14万人）などの不登校傾向のある子ども達は全国で33万人に上っています。今後、このような傾向が強まって行くなれば日本の社会にとって憂慮しないといけないと思います。

もう一つの大きい問題は、若年無業者数、ひきこもりの人の増加です。内閣府の調査結果（2013年）では15歳～34歳の若年無業者数は60万人、狭義の引きこもり（①自室から出ない、②自室からは出るが家から出ない、③近所のコンビニなどには出ることが出来るなどのケースの総称）は全国で24万人いると推計されています。また、普段は家から出ないが自分の趣味に関する用事の時だけ外出する人は準引きこもりと分類されますが、このような人が全国で46万人いると推計されています。このような大人数の問題を抱えた人の存在は、学校における臨床心理学の専門家などの負担を益々増大していくことでしよう。

さて、不登校あるいは不登校傾向にある小中高校生の総数が50万人、引きこもりあるいは準引きこもりの若者が全国で70万人いると言う事実は深刻な事態です。問題を抱えた圧倒的多数のクライアントに対して十分な臨床心理療法を実施することが困難になると危惧されています。

本稿の冒頭に述べましたように、若い人達あるいは子ども達の教育支援を心がける毎日ですが、昨年出版した「黒潮消失から始まる日々」が機縁となって宇部市のフロンティア大学の臨床心理学の先生と懇意になり、昨年秋には大学院の臨床心理学研究法特論の授業の一部を外部講師として受け持って、若い大学院生と触れ合う機会を持ってました。

自然科学における研究（特に「人のために」を主眼とする工学研究）と臨床心理学療法の研究との相似性や、臨床心理学の心の構造と仏教の心の問題に関するお話をさせていただきました。現在、発達途上における子どもの心の障害とその回復過程についての新たな物語の執筆を始めています。令和5年度にはこの原稿を基にして、フロンティア大学において「生涯発達心理学」の講演を行う予定です。この原稿の中で、不登校・引きこもりの対策はどうあるべきかを検討しているところです。乞うご期待です。（原稿はかなりの量になっているので、内容の紹介は別の機会に譲りたいと考えています）

2023年4月より「子ども家庭庁」が発足して、色々な支援の施策が実現すると言われていますが、制度的な改革と支援だけでは不十分で、子ども達のところに寄り添った支援を実現するためには多くのマンパワーが必要です。私達も頑張らなくてはと思う今日この頃です。



令和5年1月25日

## 「湯水のごとく」

AYSA 西部部会会員 江本 明夫

「湯水のごとく」という言葉があるくらい日本は水資源に恵まれている。かつてアルジェリアで生活していた時の事である。水は非常に貴重なものであることを、身をもって示していた。手を洗う時、水道の蛇口を少し開き糸のように水を出し、手を絞るようにして手を洗う。最小の水量である。

米国の留学生が日本にホームステイした時、洗い物の手伝いをして驚いたという。お湯を流しっぱなしで食器を洗う光景を見て唾然といたという。透き通った水路を鯉が何匹も悠然と泳いでいる等は驚きを通り越しているかもしれない。

2027年完成を目標にリニア委新幹線の工事が始まっている。しかし静岡県で水資源の事で中断しているという。いずれ解決はするはずである。ほかの区間の工事を始めればよい。トンネル工事ではあるまいし、なぜ数か所で同時に工事を始めないのだろうか。大きな疑問である。予算問題か。

20年以上昔の事ではあるが南京で仕事をしていた。揚子江がすぐそばを流れているが、川のイメージはなかった。清流ではなく色は土色で泥水の川である。対岸はかすんで見えない事もある。この川を上海から南京まで4万トンのセメントタンカーが逆力登って来るのである。川の水深は13メートルあると言う。

川の干満の差は大きく大型船の運航には注意が必要である。中国は山がなく平野である。南京と上海の水平距離150km位に対して高低差は十数メートルしかない。(この数値は要再調査)  
川の流れが極めてゆっくり流れている。

当時は南京と上海間は鉄道しかなかった。高速道路を建設中であった。セメント工場が必要なわけである。発展途上ではインフラの整備から始まる。我々はセメント工場建設に先立ち、水の浄水場を作った。水源は揚子江の泥水である。当初この水から飲料水が本当にできるのかと疑問に思った。浄水場は完成し生活用水と工業用水は確保された。

水資源に恵まれた日本であるが、水を大切にしたいものである。

☆

令和5年2月15日

## 「英語多読」2ヶ月目

AYSA 西部部会会員 金子 弦

以前ホームページの投稿に少し書いたように、私は今「英語多読」をほぼ毎日、一日あたり1、2時間実行している。これを3ヶ月くらい続けようと思っている。というのは辞書も引かず、分からないものはそのままにして「英語多読」を続けていけば、そのくらいで目標のレベルになると書いてあったからだ。まだ2ヶ月目程度だ。

現在のホームワークの中心はオックスフォード大学が行なっている子供向けの無料書籍の購読である。Oxford OWL というサイトのペアレント資格で登録している。やっと5～6歳向けのレベルまで到達した。しかし侮るなかれ、単語や文法構造は半端なものではない。最初は3歳くらいから始めたがそれでも知らない単語が時々出てくる。これを日本の学校で習った英文法の知識で解析しながら理解しようとするのは大きな間違いである。子供たちは辞書も英文法の知識も一切使わないで読んでいる。恐らく文法を習うのは日本と同じ中学校くらいだろう。ホームページのタイトルに、「Like native children do.」としたのはそういう意味だ。

文章が大まかな意味しか分からない状態は、モヤモヤして気持ちが悪い。つい英和をひいて意味を知りたくなる。モヤモヤ状態は恐らく脳細胞が他の脳細胞と連結しネットワークを作りたくてウズウズしている状態だろう。ここに日本語が入ってくるとどうなるか。

我々が子供時代、大人同士の話を聞いたりテレビを見た時分からない言葉が時々飛び交っていた筈だが、自然に理解できるようになった。英語でも同じで、ここで日本語に訳しながら読んで行くと、脳の中ではかなりいびつなものになって行く気がする。

完璧に通訳や翻訳者になるのならそれで良いが大変な苦労が必要になる。思うに今の学校教育はまずそれを目指している。将来、会社や役所において完璧な文書を作成で

きる事を目指しているのだろう。殆どの者にとってはもっと気楽に英語をとらえても良いと思う。正しい英語表現というのもあまり意識しすぎではないか。数学ではなく日常使う言葉なのだから、様々な表現があって良い筈だ。

ここに今読んでいる英文を引用の形で表示しようと思ったが、相手も相手、大学なのでやはりやめておこう。その6歳向け文章は、とにかく私が習った英文法の知識からすると、本当に自由奔放、文法からも逸脱しているとも感じられる文章だ。ただ分からない部分もそれなりに理解して進んで行くと何とか全体が分かってくる。とくに前置詞の使い方の奔放な事。また分からない単語もそれぞれが関連して派生して来たのだ

と想像する事で意味を類推することもできる様になる。また単語はかならずしも日本語に対応しないのは当然だ。例えば remember という言葉、これは意味が幾つもあるので覚えるのに苦労した記憶があるが、英語では意味が分化していないのだ。日本語に訳すと「覚える」とも「思い出す」とも色んな訳が並ぶ。つまり英単語丸ごとそういう感じでとらえれば良い。

また子供の本で良く出てくるのが、擬音語や擬態語。語感が日本語とまるで違うが、なるほどそういう感じ、そういう音がするかもと感じられる。むしろ英語の方が実音に近いかも知れない。これもそれぞれがまた派生して新しい表現が出てくる。英語でも日本語で若い人が自由に言葉を作り出すのと同じ状態が当然ある筈だ。

今2ヶ月目程度だが、3ヶ月続けたら果たして完璧に英語を使いこなせるようになるか。恐らくなかなかそうならないと思う。ただ難しい文章や音声を分からなくても食らいついて行く姿勢ができるのではないか。そして重要なのはこれを続けて行く事である。(子供たちは分からない言葉があってもこの言語環境の中で生きて行くしかないと覚悟して生きている。) 実は私は最初から YouTube の英語番組もほんの少しはついて行けるし、何となく意味をとらえる事ができたが、更に上達したかどうか? リスニングはこの理屈で行くと、意味を理解するより、何を言っているか言葉に食らいつく事だ。シャドーイングといわれているがまず言葉を意識する事。意味は何となく分かってくる気がする。

子供の本でもフィクション・文学的なものはなかなか理解しにくい。まず会話が出てくる。登場人物の把握、誰の発言かを意識する必要がある。日本でも歴史物がそうである。非常に分かりにくい。また日本語と違い、漢字仮名交じりでないので皆同じに見え、目がチラチラする。恐らくネイティブの人でもそうだろう。また文学なので修飾表現が出てくる。これも分かりにくい。逆にノンフィクションものはかなり読みやすい。基礎知識があることで内容も理解しやすい。特にソフトウェアの使い方を説明する文章や YouTube 番組は音声も聞き取りやすい。

ノンフィクションものといえば、とうとう最近「メタバース」という本の英語原書を買った。子供の本が読めれば、大人向けの本もそれほど違いは無いように感じたからである。確かにそうで、違いは単語と内容そのものの難しさだろう。英文としての構造はそんなに違わない気がする。

専門書というより一般向けの本だが、さすがに読み進むには大変と思い、翻訳本を購入した。こちらを読んでから英文をという読み方も許されるのかも知れない。難しいといえば、英字新聞の政治記事だ。知らない単語が沢山出てくる。これを見て英語を諦める人も多いのでは。まずぜひノンフィクションを。

とにかく新しいやりがいを見つけた。しかし読むにも続けるにも少なくとも日本語の助けを求めない意思力は必要なようである。

令和5年2月6日

## 「地政学視点から見た世界の動きに関する雑感」

AYSA 西部部会会員 北見 幹治

(本論に入る前に)

最近、世の中は大変激動しており、ウクライナ侵攻の行方、米中のにらみ合い、中国の海洋進出、台湾有事、北朝鮮のミサイル発射、世界のエネルギー資源問題と気候変動、宇宙戦争、等の物騒なニュースが絶えない。なぜこのような問題が発生するのか、これから世界はどうなるのか、日本はどうなるのかと不安ばかりを覚える。これらの問題(激動の世界)を読み解く視点として、最近『地政学視点』の重要性が増しているようなので、簡単に紹介したい。

小学生の時から、所謂、地理や地形に関して大変関心があり、世界の山脈や川の位置関係や交通街道・運河ルートなどの探すために、世界地図や日本地図を眺めることに大変興味を覚えていたことを思い起こした。成人してから『地政学』という文言に興味を感じた機会もあったが、地理・歴史への興味とは別に政治への関心は薄く、地理・歴史と政治との関連性を曖昧にしたまま不問にしていたことを付記しておく。

### ◆地政学とは何なのか

地政学とは、それぞれの国や地域が持つ地理的条件を出発点とする考え方で、地図をもとに政治や軍事を考えていく学問のようで、地理・地形というものは大きな変化は認められないので「現実的」な戦略というのは自ずと決まっていたのではないかと思われ、軍事理論であるために戦後の日本では封印されていたような気がする。地政学には、二つの基本的な基本的概念として「ランド・パワー(大陸国家)」と「シーパワー(海洋国家)」に分類され、イデオロギーという理想で語られる時代は終って再び、過去の帝国主義的な地政学で覇権を争い始めているようにも感じられる。

要するに、いくら世界情勢が混沌としてきても、各国は自国を守るためにより現実的な地政学の視点で、領土や植民地の拡大、防衛上の拠点獲得、資源の獲得に向けて考える時代になっている

以下、世界制覇のための要塞拠点(交通インフラ)、宇宙開発、気候変動、エネルギー資源問題、半導体先端技術、等の最近動向について地政学面から触れてみる。

### (1) 交通インフラと地政学

戦争においては、兵器や兵員、食料の補給を行う交通インフラである「兵站(へいたん)」の確保が生命線になる。

他国よりも多くの物質を安全に運んだり、スピーディに移動したり、広域に移動したりすることができれば、戦略上有利になる。より優れた交通インフラを備えた国がその時代の世界制覇を争っていた。

現在のロ・ウクライナ戦争の激戦区では膠着状態が続いているが、その激戦地区は正

に物資補給の交通インフラの要所である。

歴史的に見ても、覇権国家のパワー変遷と地政学視点から見た交通インフラ手段としては下記のように変化している。

- (例)
- ・モンゴルの騎馬民族・・・・・・・・・・騎馬軍団
  - ・イギリスのシー・パワー・・・・・・・・・・大航海時代
  - ・ロシア・ドイツのランドパワー・・・・・・・・鉄道網
  - ・アメリカのエア・パワー・・・・・・・・・・宇宙（移動の自由）

## (2) 宇宙と地政学

旧ソ連がスプートニク 1 号を打ち上げてから、宇宙空間がスペース・パワーとして地政学的に意味を持つようになった。スペース・パワーはエア・パワーの延長ではなく、独自の戦略思想が研究されているようで、宇宙から地上を攻撃する戦略拠点となります。スペース・パワーの最大の強みは「高さ」のようで、敵よりも高い位置を取ることで優位に立つことが可能だと考えられています。

いまのところスペース・パワーの任務は、情報収集・伝達による陸・海・空軍の戦力の強化がメインですが、宇宙空間から地上のターゲットを攻撃するという本格的なスペース・パワーの研究も進んでいるとのこと。

アメリカは宇宙軍を正式に発足させました。これは宇宙の軍事利用を活発化させる中ロに対抗したもので、先日、米国軍が米国上空を飛行していた中国の偵察気球を撃墜したというニュースが報道されました。

今後、大国間の宇宙での覇権争いが激しくなってくるのが懸念されます。

## (3) 気候変動と地政学

気候変動はこれからの地政学を考えるうえで重要なパラメータになると思われます。例えば、地球温暖化によって北極・南極の氷が解けて海面が上昇すれば沿岸部の都市は打撃を受けます。また、深刻な干ばつが起これば、大量の難民が南から北に押し寄せるため、欧米の国では難民の移動抑制のため国境の壁が必要になるかもしれません。反対に、厚い氷に閉ざされていた北極圏においては、温暖化の影響で海氷が小さくなり、一転して経済活動が可能な地域となることも期待されと同時に地政学的に改めてグリーンランドの豊富な天然資源に注目が集まるかもしれません。

地政学では、スエズ運河経由の既存の航路よりも距離が短いことと米軍不在であるメリットもあるので、ロシアは北極圏航路の売り込みに躍起になっているとのこと。欧州においては、ウクライナ戦争に伴うロシアのエネルギー戦略に制約されて、地政的に遠方の南アフリカの石炭を輸入しているとのこと、著しいインフレによる政情不安に陥っているとのこと。

気候変動に対する温暖化対策は地政学的にも世界の経済活動に大きな影響を及ぼす世界的な課題であり、その対策が求められています。

#### (4) 半導体と地政学

これまでの国の安全を守るための戦略物質は『鉄』、『石油燃料』であったが、新たに第3の戦略物質として浮上しているのが『半導体』である。

『半導体』はスマホやPC、車・家電など現代社会に欠かせないものになっているが、特に戦闘機やミサイル・レーダーなど軍事技術にも欠かせないものになっています。軍事的優位性を確保するためにも高性能な先端半導体技術が求められていますが、ウクライナ戦争ではロシアは半導体を作れないので大きな弱点になっているようです。今後、地政学的に『半導体』最先端技術・産業を持つ国が覇権を持つ可能性があると考えられますが、最先端半導体技をめぐる争いになる可能性があります。

現状では、台湾、韓国、アメリカが優位ですが、最も台湾が地政学的な大きな優位にあるため、この台湾問題が米中対立の大きな根本的な課題となっています。

#### (5) エネルギーと地政学

20世紀のエネルギー地政学の中心は中東であったが、21世紀になってからアメリカのシェール革命により中東依存度が低下しつつある。

また、ロシアでも原油や天然ガスの生産量を増やし、豊富なエネルギー資源を戦略的に利用しているのが現在のウクライナ戦争です。

アメリカやロシアのように、エネルギーを自給・輸出できる国は強国になり、エネルギーを他国へ依存するほど必ず弱点となります。

その意味で、欧州では自給率を高めるために再生可能エネルギーへの普及に注力していますが、リスクに備えるためにもエネルギー調達先の多角化が必要です。

その国の政情不安や政権転覆、戦争などによってムダになるリスクがあることも理解しておく必要もあります。

#### ◆今後の日本がとるべき戦略

現在の日本の最大の脅威は中国です。シー・パワーを強める中国を封じ込めるため地政学的にも東南アジアの各国と連携した中国包囲網戦略をとる必要があります。

沖縄では米軍基地に対する反発は強まっているが、仮に、米軍が撤退して力の空白が生じると、中国の進出が容易になります。尖閣諸島も一瞬にして奪われるかもしれません。このため、アメリカ頼みの戦略を再考しながら、日本も独立国家としての自主防衛力を高めることが重要になります。

また、エネルギー戦略の方向性については資源調達の多様化が必要であり、特に「国内資源の開発」によるエネルギーが自給率を高めることが必要不可欠です。日本の領海と排他的経済水域（EEZ）には燃える水といわれる新資源「メタン・ハイドレート」が発見されているようなので、早急に海底資源の開発を進めるべきではないでしょうか？

以上

令和5年3月10日

## 「山口県の自然災害伝承碑探訪」

AYSA 西部部会会員 住居 孝紀

私が所属する公益社団法人日本技術士会 中国本部 山口県支部防災委員会では、活動として「なぜ、そこに自然災害伝承碑があるのか」をテーマに、県内各地の伝承碑を訪れる機会を創り、過去に起こった自然災害を知ること、地域の地形の特徴、土地利用の変化などの知見を深め、今後の各地住民の防災意識の高揚、地域防災力の向上に寄与するため、「自然災害伝承碑」を探訪するイベントを開催しました。私は、以下の探訪結果報告が皆さんの防災意識高揚の参考になればと思っています。

1. 自然災害伝承碑（しぜんさいがいでんしょうひ）とは

**地震、津波、洪水、噴火**といった大規模な**自然災害**の状況や教訓を後世に伝え残すために作られた**災害碑、慰霊碑、記念碑等の碑**や**モニュメント**です。

**国土地理院**では、**2019年**3月に自然災害伝承碑の**地図記号**を制定して、ウェブ版の「**地理院地図**」や紙版の2万5千分1**地形図**への掲載を進めており、地理院地図には2022年6月23日時点で、47都道府県415市区町村1402基の自然災害伝承碑が公開されています。調査・登録が遅れていたり、地元でもあまり知られていなかったりする伝承碑も多く、**日本全国**の実数は2000~3000と推測されています。



### 「自然災害伝承碑」掲載市区町村一覧

※江刺町村名をクリックすると、地理院地図が開きます。

市町村名	伝承碑数	伝承されている災害	写真の二次利用について (左欄は国土地理院コンテンツ利用規約)	掲載日
広島県 <a href="#">廿日市市</a>	8	洪水(1925)、短崎台風(1945)、ルース台風(1951)、地すべり(1964)		2022-03-29 2022-06-23(追加)
広島県 <a href="#">江田島市</a>	3	枕崎台風(1945)		2021-07-16 2021-08-06(追加)
広島県 <a href="#">府中町</a>	1	洪水・土石流(1926)		2021-10-15
広島県 <a href="#">海田町</a>	1	洪水・土石流(1907)		2020-12-16
広島県 <a href="#">熊野町</a>	1	平成30年7月豪雨(2018)		2021-09-01
広島県 <a href="#">坂町</a>	3	洪水・土石流(1907)、平成30年7月豪雨(2018)		2019-06-19 2021-07-16(追加)
広島県 <a href="#">大崎上島町</a>	1	高潮(1884、1915)		2021-11-12
山口県 <a href="#">宇部市</a>	2	周防灘台風(1942)		2021-06-25 2021-08-06(追加)
山口県 <a href="#">山口市</a>	7	洪水(1918)、大正14年9月1日の豪雨(1925)、周防灘台風(1942)		2019-09-01 2020-12-16(追加)
山口県 <a href="#">萩市</a>	4	戸蔵の大水(1836)、洪水(1919、1966)		2022-03-29 2022-06-23(追加)
山口県 <a href="#">防府市</a>	6	洪水(1918)、令和2年7月豪雨(195)、平成21年7月中国・九州北部豪雨(2009)		2021-07-16 2022-03-09(追加)
山口県 <a href="#">山陽小野田市</a>	1	周防灘台風(1942)		2021-07-16
徳島県 <a href="#">徳島市</a>	2	安政南海地震(1854)、慶応2年雨の大水(1866)		2020-06-12
徳島県 <a href="#">小松島市</a>	4	安政南海地震(1854)、昭和南海地震(1946)、明治32年9月の台風(1889)		2019-07-31 2021-12-21(追加)

(出典:フリー百科事ウィキペディア (Wikipedia)) 国土地理院の最新のデータによると山口県内では20か所(宇部市:2か所、山口市:7か所、萩市:4か所、防府市:6か所、山陽小野田市:1か所)が登録されています。なお、宇部市の2か所および山陽小野田市の1か所は、戦前の昭和17年周防灘台風被害として伝承碑が建てられたものです。

## 2. 探訪日時および場所

探訪日時は2022年(令和4年)11月20日(日)10:00~15:30で、山口市・防府市地域(佐波川流域)の4か所を、川の源流に近いところから中流・下流と広範囲に廻りました。

最上流部の石碑は、大正14年9月の豪雨で13軒の家屋に被害が発生したとあり、古老の話では、川的位置も変わっているとのことでした。2つの沢が合流しており、流木が1か所に集中すると被害が出やすいと推測しました。このような地形にある家屋は、要注意です。

中流・下流の石碑は、数か所で洪水が氾濫した最高水位が記されていました。このように複数の石碑があることは、水害が頻繁に発生し堤防の整備が追い付かなかつたためではないかと推測しました。その後、堤防が整備され橋も架け替えられ、道路も上げられています。この状況と2018年(平成30年)7月に倉敷市真備町で発生した洪水の水位を比較してみると、倉敷市の被害はこれらとはけた違いの高い水位だったと推測できます。

## 3. ライフケア高砂の悲劇

2009年(平成21年)7月に発生した土石流で防府市真尾にあった老人福祉施設が直撃され、12名(災害関連死を含む)が犠牲となったことは、当時マスコミで大きく報じられ皆さんも記憶されていると思います。

今回この地を訪れてみると、当時の被害を示すものは何もなく、太陽光発電設備が広がっていました。近くに災害伝承碑があるので、探してやっと場所が特定できたのです。地形は沢で勾配は急です。今では砂防堰堤があり、一部の土砂を貯める事は出来ませんが、大量の流木があると下流に溢れることは明らかです。

当時土石流が発生する予測は十分可能でしたから、建物内に侵入しないように山側は壁のみにして防ぐことや、気象情報を早期に入手して高い場所への移動を可能とする人員配置をすとか、各種の防御方法があったように思います。  
(地元自主防災会との連携はどうだったのか)

現在の老人福祉施設は、佐波川の対岸に山裾より少し離れた高台に移設されています。多数の利用者が生活する施設の立地は、行政のみでなく専門家の意見を入れて、災害に強い構造にして貰いたいものです。



#### 4. 災害教訓事例集～後世に災害を語り継ぐ～

山口県が令和2年に発行した冊子によれば、風水害の被害例が最も多く、戦後の大きな被害だけでも13回記録されています。また、地震は340年前から7回起こっており最大震度で6～5が記録されています。現在全国規模で心配されている南海トラフ地震も、揺れや津波被害によって県内で大きな影響を与えると懸念されており、一方、活断層が10以上あるといわれていて、宇部市にも影響を与えると懸念されています。活断層は、直下型であり地震が発生すると影響は大きく、人的被害の大きさも注意する必要があります。

自然災害伝承に関しても調査されており、16の伝説・昔話や23の災害教訓が掲載されています。

#### 5. 今後の活動

今回の探訪は県内の20か所の自然災害伝承碑の5分の1であり、引き続き現地に足を運び防災にどのように活かせるか、考察を続ける予定です。石碑は作成に時間と費用がかかることや協力者がいないと出来ませんが、貴重な記録媒体です。今回の探訪の時も現地の記録に残っていない石碑が見つかっており、史跡としての価値があれば良いと思い、教育委員会にも情報提供を行いたいと話合っています。

参考資料：「災害教訓事例集」発行：令和2年3月、山口県総務部防災危機管理課

令和5年2月24日

「電子書籍 小説 碧き海舞台 まえがき」

AYSA 西部部会会員 高津清流

これは、戦国時代から江戸初期に到る中国地方の一国人領主家の物語である。具体的には、後に長州藩の永代家老家になる益田元祥とその父・益田藤兼が各々一人称で語る物語である。

戦国時代、石見西部を治めていた益田家は毛利家と敵対した。両者の緊張が最高になった時、益田家十九代・藤兼は毛利元就次男の吉川元春と和議を結んだ。その後、元春に従い、毛利傘下として各地で戦うことになった。

なお、家が残ったことが幸いし、和睦の翌年、藤兼に男子が授かった。その子の名前は益田次郎。関ヶ原の戦の後に大きく減封された毛利家の財政危機を救った益田家二十代・益田元祥の誕生である。次郎は豊かな自然と家族の情愛に包まれ、健やかに育った。やがて、吉川元春の娘を娶り、多くの子を成した。武将としても多くの軍功を残した。

元祥は、運と不運の織りなす中で、たまたま家督を継ぎ、関ヶ原の大戦のあと、萩開府時の困難を克服し、その後の経済的基礎を固める大活躍をした。結果、長州藩の筆頭永代家老家にまで昇りつめた。元祥の大きな功績で益田家も、更には毛利家も命脈を繋ぎ、はるか後の明治維新につながった。

シリーズ作品の中で、この一篇は、八十二歳という類まれな長命で、天寿を全うした益田元祥の人生で言えば、助走期間ともいえる人生前半の物語である。著作者として常に頭から離れないのは、益田家二十代・元祥はどうして後の大活躍の素地を作ったのか、人格形成に影響が大きかったのは何であったらうかという素朴な疑問である。その疑問を元祥自身に問いながら筆を進めた。

だれにとっても、人生前半は親と子が一緒に生き、過ごす時期である。更に当時の国人領主の家督相続は、一族、家臣、領民の全てに多大な影響を与える。父は子に家の未来を画き、自分の決断、判断を子に見せて学ばせたのであろう。

戦国時代の平均寿命は、武士が四十二歳くらいであり、庶民は三十歳位であったろうとの推定も発表されている。短命なこの時代、早く子供を作り、その子を結婚させ、孫を作り、その孫の成長を見届けることを誰もが理想としたであらう。生きている間に、己の代に到る家の持つ力と知恵を子孫にバトンタッチ出来れば少しは安心できる。

その為にも領主は跡取りの成長と教育に力をそそぎ、子孫が自分を超越る活躍をすることを期待したであらう。一方、子供は一門を含む先祖が築いた周辺豪族、大名との絆を学び、手に入る歴史書や兵書あるいは身近に起こった戦に学んだ。とりわけ最も身近な父親の生き方は、直に見聞きすることが出来た。それは成功であらうと結果と

して失敗した方策や戦いであったとしても、強烈な教科書として子孫に伝わったであらう。

シリーズ作品とすれば、親子を対比させながら、それでもなお、親子一体として捉えることで、益田家の生き様を理解できると考えた。この作品は、その大活躍した益田家二十代元祥の幼少期、嫁を貰い、子を成し、育て上げ、更に孫の顔を見るころまでの期間の物語である。

既に発表した作品との関係で言えば「[石見春舞台](#)」は十九代・益田藤兼の生きざまと活躍を描き、「[郡山城大舞台](#)」は「[石見春舞台](#)」後の働きを藤兼が語っている。その篇では断片的に十歳の二十代元祥が父親と行動を共にしている。

本作品集は全て一人称で書いており、シリーズ作の中に、親子同一場面もある。その時の親の観点、子の観点で読み取って、比較して頂くことが興味の対象に加われれば望外の幸である。子は親を見ながら、影響を受けながら成長したことには疑いはない。

これらの物語は一篇一篇独自の内容を持ち完結する。これから更に書き進めるシリーズ全体を貫いてみれば氏と氏(特に毛利氏)に対する「報恩」や「縁(えにし)」を核とする更に大きな物語世界が形成される形態を考えている。ご期待下さい。

以上

令和5年2月3日

## 「2040年の日本」(野口悠紀雄著)を読んで気付くこと

AYSA 西部部会会員 宮崎 修五

宇部市の定期文化講座「生涯学習」の授業が終わり、妻との待ち合わせまで時間があるので、いつもの習慣で本屋に立ち寄った。店内をぶらぶらしていると、「2040年の日本」の新書本が目に入った。「2040年の日本？」今の自分の年齢は既に77歳である。この年には95歳になるが、果たして生きているのだろうか？でも、どんな時代が想定されているのか”ちょっと覗いてみたい！”。帯には「20年後が分かると“いまやるべきこと”が見えてくる～未来が好転するか暗転するかは、あなた次第～」と。これから80歳を迎える自分の生き方を考えるのに、何か暗示してくれるものがあるのではとの思いも重なり気合で購入してしまった。著者は野口悠紀雄氏、彼はマスコミに頻繁に登場している経済学者(専門は計量経済学)ではないが、彼が書いた書籍からは真摯に日本の将来を数量的に分析し、様々な提言をしている。「財政危機の構造」(サントリー学芸賞)や「バブルの経済学」(吉野作造賞)等は力作である。

読みはじめると、彼の分析手法(計量経済)であるデータをフルに活用し推敲していることが良く分かる。彼は、すべての政策の基本は日本の経済成長率をどのように判断して予測するかであると述べている。例えば、実質成長率が1%か、2%かで政府の未来予測は大きく変わる。過去、様々な重要施策は、最善・最悪シナリオを想定して企画立案されているが、実態は常に最悪シナリオに引きずられてきていると、私は思っている。まさしく財政の健全化(プライマリーバランスの黒字化)が先延ばしになって進まないのはその事例の一つであろう。

この書籍で焦点を当てているのは、「医療・介護」「少子高齢化」「自動車」「エネルギー」「量子コンピュータ」「人材育成」で、夫々の分野で「デジタル化」への技術開発がどのように進んでくるのかを説いている。

私達は、真面目に働いていれば、いつまでも「健康で文化的な生活」が送れるような社会が維持できることを望んでいる。しかし、今後の日本で現実にそれは可能だろうか？これから増大する医療・介護の対策は充分だろうか？事態はそれほど簡単ではない時期に来ているのでは？そして、医療・福祉が最大の産業となる20年後の異常な姿を想像すると、日本の高い成長率は期待できないのではと、思う。そんな中でも、医療や介護技術は大きく進歩している。例えば、ガンが克服される。人間とAIの融合が可能となる。「ナノマシーン」を用いて、治療する。「細胞療法」「ゲノム編集」等々、期待できるものばかりだ。しかし、翻って考えると、結局は、「医療費の増加は、医学の進歩によってもたらされた」

ということであるのも事実。このように考えるとこの事実は、私たちにとって「負の経済」と言えるのかもしれない。

昨今の出生率低下は、少子化に拍車をかけ深刻化を増してきている。政府は、「次元の異なる少子化対策」の名の下で、様々な施策を提示している。しかし、彼は、2040年の人口動態を考えると、生産労働人口は今と余り大きな変化はないとしている。むしろ今の少子化対策（0歳～14歳までの人口増加）は、この20年を考えると育児や幼児教育の課題がより深刻化してくることを提言している。今は、女性（例えば、配偶者控除の排除）や高齢者の働き方改革（リスクリング、年金支給の開始年齢を70歳へ）は急務であると。

自動車は、EV完全自動化へと進み、それによる影響（良くても悪くても）は計り知れないものがある。空飛ぶ自動車も？可能であれば、一度、乗車してみたい。私には、難しいだろうが、メタバースで可能かもしれない。

エネルギーは、期待されている再生可能エネルギーがどこまで拡大できるか？近い将来、脱炭素に向けてのエネルギーの技術開発も相当進んでいることが伺える。原子力の「核融合発電」は期待したいが、中々難しいようだ。

量子コンピュータは、化学やバイオの世界で有効利用が進んでいるが、私はAIとの共存による機械学習の高速化の技術開発を見てみたい気がする。遠隔操作、自動運転、自動翻訳、ロボット、ドローン等様々な分野での応用が期待されているし、私達の生活様式も多く変化するだろう。スポーツの世界でもそうである。昨年のサッカーワールドカップ、予選の最終戦「スペインと日本」日本の勝利をもたらした「三苦薫選手」の折返しのセンターリング、ゴールラインを割っていたかどうかの判断は人間の目では不可能である。ライン上に残った1ミリの判断は、VARでしかできなかった。「人間とAIの融合」、どのようになるか、私にはよくわからないが、“夢”のような世界が想定される。

そのような世界が見通せる中で、彼は、日本のデジタル人材は劣化していると。そして日本のデジタル化は将来に向かって進んでいるのではなく、「バック・トゥ・ザ・バースト」だとも言っている。つまり過去に進んでいるように思えてならないと。日本の急務は「デジタル人材」の育成である。未来は選択するもので与えられるものではない。日本がどのような選択をするのか。そして、私個人がどのような選択をするのかは、おのずと決まってくるような気がする。

この書籍を読み終わって、考えてみると、私にとって“夢”のような話であるにしても、孫たちの世代では起こりうる話であろう。私の世代は、「アナログ」（論語と算盤）で、成長し自分というものを形成してきた自負がある。しかし、この年齢になっても、「デジタル」世界の便利さ（例えばe-tax）を享受したいのも事実。何とか「アナログ」をベースに「デジタル」を吸収し、今の生活基盤を維持していきたいと思う。（完）

令和 5 年 3 月 1 日

## 「ラジオ体操と乾電池」

AYSA 西部部会会員 宮本 政英

月曜から金曜日まで近くの広場で、毎朝 6 時 30 分から始まる NHK のラジオ体操をご近所の方々と始めて 8 年以上になる。毎朝、15～6 人程度のシニアが集まる。体のみならず心の健康にも大変良いと思っている。

11 月に入ると日の出の時間が遅くなり 6 時 30 分では暗くなってくる、このため時間を 7 時に遅らせて始める。去年は 11 月 7 日（月）から 7 時に開始することにした。この時は録音したラジオ体操を CD ラジカセで流す。

NHK のラジオ体操は、月曜から土曜日まで、毎日午前 6 時 30 分と 8 時 40 分、正午と午後 3 時に放送される。いずれも第 1 体操と第 2 体操は共通であるが、最初と、第 1 と第 2 体操の間に行われる簡単なストレッチは、曜日によって異なる。また、同じ曜日でも午前中と午後の体操には違いがある。従って、月曜から金曜までの朝のラジオ体操を録音するためには、各曜日 8 時 40 分からの放送を逃すことができない。10 分間の放送であるが、朝の忙しい時間でありうっかりして聞き逃すことが多く、月曜から金曜日までの 5 日分を録音し終えるのに 2・3 週間を要したものである。

現在は、NHK のラジオ放送番組は、放送後 6 日間はネットで何度でも聴くことができる（「聞き逃し♪」これがいつから始まったかは知らない。）。テレビの NHK プラスと同じように、聞き逃した番組を後からネットで聴けることが、ラジオでもできるのを知ったのは去年の 11 月頃であった。昨年からは「聞き逃し♪」の存在を知ったので、1 日で月曜から金曜までの朝 6 時 30 分の体操を録音できる。

体操する広場は一般家庭用の電源がなく CD ラジカセには単 3 の乾電池が 6 本要る。うっかり電池切れを起こすと体操の号令を自ら発して体操する羽目になる。電池切れを起こさずしかも十分に電池を使い切ってしまうために、こまめに電池の電圧をチェックすることになる。よく使われるアルカリ乾電池は、公称 1.5V であるが、初期電圧は約 1.6V、使用とともに電圧が低下するが、ラジオ放送を鳴らすときには、1.2V くらいまで使える。また、電圧は気温の変化や、使用直後としばらく休ませたことによっても変化する。余裕をもって電池を交換すれば問題ないのであるが、節約しようとぎりぎりまで使うと困ったこ

とになる。

昨年、朝 7 時開始に変更した 11 月 7 日には、前日に測った電圧が 1.25V だったので、いけると思ったが、当日の朝スイッチをいれても CD ラジカセが正常に鳴らない。結局、自宅まで駆け戻って電池を交換してきた。幸いにも CD で体操を流す日なので 10 分ほど遅らせて開始できた。原因は、その日はラジオではなく CD プレイヤーを使ったこと、気温が低かったことが影響したようである。

アルカリ乾電池の推奨使用温度範囲は 5℃～45℃である。寒い朝には使い捨てカイロでラジカセの下から電池を温めるようにしているが、この程度の寒さなら大丈夫と思い甘く考えてしまった。

一昨年、1.5V リチウム乾電池は推奨使用温度範囲が-40℃～60℃であることを知ったので、気温が低くなるとリチウム乾電池（価格はアルカリ乾電池の約 3 倍）を使うようにしていて、この時も自宅に駆け戻って準備していたリチウム乾電池に交換した。

単 3 のリチウム乾電池は公称 1.5V であるが、初期電圧は 1.8V で高い。また、使用後にしばらく休ませると、使用直後の電圧から回復し電圧が高くなる。回復の程度は小さいが、アルカリ乾電池も同様なことが起こる。

昨年の最終日（12 月 9 日）、前日の電圧は、5 本が 1.54V、残りの 1 本が 1.39V であった。この程度の電圧ならまだ使えるだろうと思い、その朝は CD プレイヤーを鳴らした。しかし、ラジオ体操は何回も音が飛び聞き苦しかった。使用直後の電圧を図ると 6 本の乾電池の内 5 本は約 1.5V、1 本だけ 0.8V になっていた。1 本だけ 1.5V 以下に電圧が下がっており、不良品が混じっていると思った。早速、メーカーであるパナソニックにネットを通じて苦情を伝えると、調査するので 6 本の乾電池とその使用状況などを送るように言われた。

年が明けて送られてきたパナソニックからの調査結果は、「すべて一様に消耗しており、電池を分解もしたが異常は認められない、不良品ではない。」とのことであった。パナソニックからは新品のリチウム乾電池 8 本も送られてきた。

ただし、「リチウム乾電池は初期の開路電圧が 1.8V、開路電圧が 1.7V 以下になると容量が無くなった状態である」とのこと、よく使われる「アルカリ乾電池は、初期の開路電圧が 1.6V、1.2V 以下で容量が無くなった状態である」とのことであった。リチウム乾電池の公称電圧は 1.5V とされているから、1.7V 以下で容量が尽きた状態であるとはまったく思ってもいなかった。最終日のラジカセの音飛びの原因は電池の消耗であろう。

ネットを見れば、乾電池の種類や特性、使い方が解説されてはいるが、使える電圧の具体的な範囲などは、使用する機器によって変わるから書かれていない。一般的に言えることであるが、機器が不具合になった場合、「取説」だけでは何ともならない場合には、メーカーに直接問い合わせることになる。しかし、電話では長時間待たされるし、ネットの問い合わせフォームでメールを書くことになるが、不慣れな年寄りには、これがなかなか面倒で送信できるまでに以外に手間取る。面倒になって止めてしまいたくなる。根気よく頑張つてメールが送信できると、メーカーの対応は大変丁寧で納得でき、得るものが多いにある。

物価高騰の世間では、賃金アップ、生産効率アップ、デジタル活用、が重要なのだと盛んに言われている。なかなか慣れることのできないネット利用を、効率アップしてより快適な生活を送りたいと試行錯誤している。今年のラジオ体操は3月6日に始める予定である。高齢者には「ビスケット（微助っ人）」くらいがいいと新聞で読んだことがある。ラジオ体操のお手伝いも「ビスケット」だと思っている。



令和5年3月4日

## 「山田洋次とちくわとうべと」

AYSA 西部部会会員 村野司郎

金子みすずの童謡詩をイメージできそうなタイトルにしてみました。  
私は「男はつらいよ」シリーズに代表される山田洋次監督の映画のファンで折に触れて氏の映画を繰り返し見えています。

過日、NHKの全国向けTVで同氏に小野文恵アナがインタビューする「ここから」という番組がありました。かなり反響があったようで皆さんの中にもこれを見られた方もおられるのではないかと思います。

氏は大阪の生まれでご父君が満鉄の技師であったことから家族（父母三人兄弟）共々少年期を大連で過ごし敗戦に伴い命からがら帰国し（1947年）、一時期伯母の身寄りを頼って数年を（15～18才）を宇部で過ごしたとのこと。氏からこれまで宇部の事はあまり語られなかったと思いますが、宇部の事が話に出るというので、興味を以ってこの番組を見ました。

番組での小野アナの質問；（実際には一件ごとに画像も添えて展開されました）  
Q1. 「映画を通して描きたかったことは何か？」

A. 戦後の混乱と貧困の時代にあった日本人の「助け合い」、「思いやり」、「心のぬくもり」などという価値観を描きたいと思って来た。・・・

映画では、庶民の典型として流れ者、社会の逸脱者である「寅さん」を通じてそのことを悲しくもおかしく描いてきた。

実はその原点が宇部で過ごした少年期にあった・・・という。

当時は日本全体が貧困のどん底にあり庶民はただ生きるためにその日暮らしをしていた。氏もまた、日銭を稼ぐため海辺にあったちくわ製造工場（サメやエイが原料のためアンモニア臭のある代物）に行ってちくわ製品を仕入れ、自転車でアチコチ卸して回ったのだという。

ある時、売れ残りが出たため仲間から伝え聞いた、当時、西宇部にあった競馬場周りに立つ出店の「おでん屋」に行き、店のおばさんに残り物を買ってくれるよう頼み込んだ。

・・・「これ売れ残ってしまったのだけど安くしておくから買ってもらえない・・・」おばさんは「中学生かい？ 大変だネエ。いいよ、残ったものは全部置いて行きな。買ってやるから」さらに続けて「あしたからも売れ残ったら持つておいでよ。全部買ってやるから」と。

おばさんにすれば何気ない一言だったかもしれない。でも自分にすれば……。自転車での帰り道、「涙が出て止まらなかった!!

このおばさんがまるで、慈悲深いマドンナのように思われた。」と。続けて「今思うと私の映画の原点はこの『宇部』の『ちくわ』にあるといえるね」と。

私（村野）自身も、この場面で思わずウルッと来ました。

Q 2. 「人はなぜ生きると思うか？」

A. 人間長いこと生きていて、時には「ああ生きていてよかった!! 今日心から嬉しい気持ちになった!!」と思うことがあるじゃないか、そういう喜びが忘れられなくて生きていくのじゃないのかな。この思いが私の映画作りの原点であり、これが自分の強みでもあり同時に、それを如何も越えられない弱みでもある。・・・と。(非常になり切れない人の良さ・・・なのか)

Q 3. 「幸せとはなにか？」

A. 人は自分の欲望が満たされることが幸せの一つであることは間違いないが、それにもまして大切なことはこのおでん屋のおばさんのような「思いやり」、「利害を超えた善意」を感じ取る時ではないのかな。自分の存在が尊重され、周囲の人と共存していることを自認できることが幸せかな。

以上でTV「ここから」の話は終わりですが、私はこの番組を見ていて山田洋次の世界は、素晴らしいなと思いました。「人情の機微に触れる」とか「琴線に触れる」といういい方があるが、氏の心情/哲学こそ、それに当てはまるなと確信しました。

そして別の山田洋次作品を思い出しました。「幸福の黄色いハンカチ」です。後半のクライマックスシーンで・・・

夕張炭鉱労働者である主人公（高倉健）が、ひよんなことから犯罪に手を染め、刑期を終えて妻（倍賞千恵子）の待つ炭鉱長屋に戻る時のシーンで、主人公は妻が本当に前科者の自分を迎え入れてくれるかどうか不安の気持ちを抱きながら近づく道すがら視界に入ってきたものは・・・

空き地に立つ旗掲揚ポールから張られた二本のロープに括りつけられたこれでもかという程の「黄色いハンカチ」群!!・・・。

この時の主人公の感激の心中は!!・・・これこそ、山田監督の言う「幸せの極み」だったのではないかと・・・。

結びに、おこがましい話ですが、私にも自分自身の幼い頃に、貧しいながらも「自分の幸せ」を実感した経験があります。下村湖人の「次郎物語」のような話だったかもしれませんが、自分にとって本当の幸せとは、「自分のことを掛け値なしで親身に思ってくれる人(私の場合は母)と一緒に暮らせること」が子供にとって一番幸せと悟りました。

この話は大事に秘めておくべき話を思っています。

(完)